

現代政治文献における中日同形語の使用実態と対訳の一考察

侯 仁鋒・鞠 娟

一、研究の意義

中国語と日本語は漢字を共有している。したがって、「国家」「政府」「国民」などのようないわゆる同形語は、中日両言語の文章で多く使われている。このような同形語については、分野別に調査がなされている研究がある。例えば、化学分野、医学分野、経済分野、動植物分野などで、同形語の存在実態が明らかにされている。しかし、政治分野、特に現代政治関係の文献については、同形語の使用実態の調査がまだなされていないのが現状のようである。したがって、その実態を明らかにすることは十分に意義があると思われる。

また、政治文献は、中日両国民が政府の方針を相互に理解しあうために重要な文書である。だから、政治文献における同形語の使用実態を研究することはその応用において重要な価値があると同時に、中日両言語の異同の理解においても、翻訳作業の実践においても大いに参考になると考えられる。

二、研究の目的

本研究は対象とする同形語に関して、中日対訳の観点から次の諸点を究明することを目的とする。

1. 量的視点から、政治文献の原文とその訳文との対照によって同形語の数を確認し、先行研究を参照しながら意味の異同による分類に基づき、その割合を明らかにする。

2. 原文から訳文へ、そっくりそのまま写す語、一部重なっている語および完全に別の語となった語という分類で、それぞれその数を確認し、割合を明らかにする。

3. 2の結果をもとに、比較の視点から、統合的な研究を加える。それを通して、政治文献における同形語の対訳の手法、また、意味のずれ（差異）が生じる社会的・文化的要因、中日両国民の同形語への理解と受容性の異同及びその傾向を推定する。

本論文は紙幅の都合より、研究概要、主な調査データ、調査から得られた見解のみ発表することにする。

三、研究の対象

本研究は以下の資料を研究対象とする。

1. 中国の文献

文献名	原語	翻訳	略称
中華人民共和国憲法*	中国語	その日本語訳	中国憲法（以下同）
1996年全国人民代表大会政府工作報告	中国語	その日本語訳	96年全人代政府報告（以下同）
1997年全国人民代表大会政府工作報告	中国語	その日本語訳	97年全人代政府報告（以下同）

*便宜のため、中国の文献も日本語の漢字を使用している。

2. 日本の文献

文献名	原語	翻訳	略称
日本国憲法	日本語	その中国語訳	
第164回国会における小泉内閣総 理大臣施政演説	日本語	その中国語訳	小泉内閣施政演説 (以下同)
第165回国会における安部内閣総 理大臣施政演説	日本語	その中国語訳	阿部内閣施政演説 (以下同)

中国語も日本語もそれぞれ3件である。

3. 資料の出所は以下の通りである。

- (1) 「中華人民共和国憲法」は1993年修正版であり、その日本語訳は、宮坂宏編訳『増補現代中国法令集』東京 専修大学出版局(1995)によるものである。
- (2) 「日本国憲法」は在中国日本国大使館広報文化センターによる印刷物(2005)である。
- (3) 96、97年全人代政府報告は、北京日本学研究中心が発行した中日対訳コーパスによるものである。
- (4) 小泉、阿部総理大臣施政演説は、中国駐在日本国大使館のホームページに掲載されているものである。

同じ分野かつ時間的にはほぼ同じ時期であることから、以上の文献を対象とする。

四、同形語の認定基準

1. 語形

本研究で取り扱う同形語は形態論上の狭義の同形語ではなく、広義の同形語のことである。つまり、中国語を表記する中国の漢字と日本語を表記する日本の漢字の間には、例えば「選挙」と「选举」のように、字形の差異が存在しているが、本稿では敢えて現行の細かい形の違いを無視して、中日同形語と判断することとする。なお、同形語という場合、同形である二語の発音の異同を無視して考える。つまり、日本語の漢語を対象とするだけでなく、広い意味で訓読みの和語も含めることとする。

また、介绍／紹介、称呼／呼称、限制／制限、修改／改修、设施／施設、和平／平和など、文字の配列順序がちょうど逆になっているようなものが存在している。これも同形語として扱うことにする。

2. 意味

中日同形語を意味の異同によって分類するに先立って、まず、その語義解釈の基準を決めるべきである。本研究は中日同形語における語義の異同を判断するに当たって、一般的に、語義はその語が有する実質的な概念、言い換えれば辞書的意味をとる。すなわち、他の語との関連などによって出てくる用法の相違は本稿では主な基準とはしない。したがって、中日両言語で同義と認めたものも実際の表現にあっては文脈などに応じて、同義の別語が使われることも当然ありうる。

3. 意味の分類

同形語は意味が同じでも、文法的用法、品詞相違、運用特徴、修飾対象、ニュアンスなどが違う場合が少なくはない。分類する際、準拠とする辞書及び調査者の語義判断の基準は必ずしも同じではないので、同じ語でも観点により異なるグループに分類されることが珍しくない。しかし、今まで中日同形に関する研究と分類は、一応の基準としては、文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』(以下『対応』

と略す)に従ってきた。『対応』が出版されて以来、各グループに属する語が適切かどうかについて、様々な批判も受けてきたが、その分類自体は同形語を見分ける際の便宜的なものである。『対応』の分類はいわゆる概念的意味(辞書的意味)に基づいて行なわれるものである。その分類は以下の4種である。

Same(S):日中両言語における意味が同じか、または、きわめて近いもの。

Overlap(O):日中両言語における意味が一部重なっているが、両者の間にずれのあるもの。

Different(D):日中両言語における意味が著しく異なるもの。

Nothing(N):日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの。

言い換えれば、「S」は同形同義語、「O」は同形類義語、「D」は同形異義語である。「N」は同形語ではないので、ここでは検討しないことにする。

本研究も文化庁の『対応』の同形語に対する分類法に基づき、同形語を同形同義語「S」、同形類義語「O」、同形異義語「D」と三分類する。

五、研究の方法

1. データベースによる抽出

本研究は北京日本学研究中心が開発した中日対訳コーパスを利用して、上述した研究対象から同形語を抽出する。従来の手作業より迅速はもちろん、確実である。

2. 原文とその訳の両面から使用実態を把握

中国の文献は中国語とその日本語訳から、日本の文献は日本語とその中国語訳から、というふうに関面から、同形語の使用実態を把握する。これも本研究がほかの研究と違うところである。

3. 分類と統計

1による同形語を意味の異同によって分類し、そのパーセンテージを算出する。また、その役割や使い方を観察する。

また、同形語を中日対訳の視点から、原文から訳文にそのまま写す語、一部重なっている語とまったく違う語という三種類に分けて、そのパーセンテージを算出する。それから、その作業の妥当性を検討する。

六、データの分析

中日対訳の視点から、原文から訳文にそのまま写す語(「S'」類)、一部重なっている語(「O'」類)とまったく違う語(「D'」類)という3種類に分けて算出できた割合は表1の通りである。

表1 中日対訳におけるタイプ別の占める割合

研究対象	類 型			合計%
	S'	O'	D'	
中国憲法	86	8	6	100
日本国憲法	76	12	11	100
96年全人代報告	80	15	5	100
97年全人代報告	68	26	6	100
小泉内閣施政演説	70	21	9	100
阿部内閣施政演説	69	23	8	100

研究対象とした6件のうち、いずれにおいても最も多いのは「S」類の語であり、皆全体の半分以上、平均75%を占めている。次に来るのは「O」類の語である。最も少ないのは「D」類の語で、ほとんど10%未満であり、平均約8%を占めていることが分かる。

また、それぞれの文献における割合をみると、「S」類では最も多いのは中国憲法の86%であり、一番少ないのは日本国憲法の76%である。「O」類では、最も多いのは97年全人代報告の26%であり、一番少ないのは中国憲法の8%となっている。その差が大きいと判断される。それと逆に、「D」類のところは、いずれも5～11%の間であり、その間の差が「S」類と「O」類ほど大きくない。

中日対訳の視点から考察すると、結果として現代中日政治文献には、原文から訳文へそのまま写す語はたくさん存在し、完全に違う語になったものはごく少数であると言える。

さらに、この結果を文化庁の『対応』の同形語に対する分類法に合わせて見ると、同形同義語の「S」類の語は、原文から訳文にそのまま写すのがその大多数である。同形類義語の「O」類の語は、原文から訳文に一部重なっている語になっているのがその大多数であり、そのまま写すのもごく少数ながら見られる。それに対して、同形異義語の「D」類の語はすべて完全に違う語となったことが分かる。

また、単純な意味的分类データと中日対訳分類データを比較すると、研究対象から抽出した同形語の総語数は違っていることが分かる。表2のようにまとめられる。

表2 調査法による同形語総語数の対照表

調査対象	調査方法		語数差
	意味的分类 (述べ語数)	中日対訳分類 (述べ語数)	
中国憲法	5918	5865	60
日本国憲法	2104	1891	213
96年全人代報告	5282	5271	11
97年全人代報告	5074	4828	246
小泉内閣施政演説	1733	1621	112
阿部内閣施政演説	1245	1201	44

同形語の総語数は、中国の3件の語数は日本の3件の語数より2倍以上多いことが分かる。その原因は主として、前者の内容は量的に後者より多いことにあると思われる。

また、3件の中国の政治文献は、日本語訳では、同形語の総語数が減っており、3件の日本の政治文献も中国語訳では、同形語の総語数が減少されていることが観察された。これは、主として、中国語を日本語に翻訳する際、日本語では一部は和語に取って代わり、日本語を中国語に翻訳する場合に、中国語では省略された簡潔な表現をとったためだと考えられる。

七、考察

上述したように、同形語の抽出、分類、統計、対照、文脈における使用実態の観察などを通して、以下のような見解が得られた。

1. 中日それぞれの3件の文献は、例えば、「国家体制」、「政治」、「経済」、「文化」、「外交」、「教育」

など、ほぼ同じ内容が書かれているので、予想の通り同形語は多かった。

一方、中国の全人代報告は、得られた成果や目標を挙げるため、数字表現が大量に使用されている。これに対して、日本の内閣施政演説は、数字表現は少なく、問題解決の記述に紙幅をとっている。内容の特徴としては、この点が指摘できる。

2. 中日対訳において、中日両方にも存在する漢字からなっているものの片方の言語には本来ない言葉を中日同形語として、説明も、解釈もせず、そのまま相手の文章に写すことが見られた。例えば、中国語から日本語に、「効益(效益)」、「初葉(初叶)」、「競賽(竞赛)」、「農用(农用)」、「老区」、「自救」など、日本語から中国語に、「年金」、「公団(公团)」、「食育」、「連立(连立)」など、この現象にはずいぶん愕かされた。重要な政治文献でありながら、このようなやり方は無責任であると言っても過言ではない。それによって、相手同士が互いに理解できず、誤解をも起こす恐れが有りうるからである。したがって、この結果は、同形語の認定はいい加減にはいけないし、互いにそのまま写すことを慎まなければならないことを示唆している。

3. 同形語の類別語数及びその割合について、本研究のデータは現代政治文献においても、中日同形語にはやはり同形同義語が最も多く、次に同形類義語があり、同形異義語が一番少ないことが分かった。これは他の分野の先行研究のデータ結果と変りはない。

4. 同形語の使用実態の研究なので、今度の研究対象の文献には数字が大量に使用されている。また、中国語のほうは主にアラビア数字、日本語のほうは漢数字が多く使われている傾向がある。いずれにしても、数字の使用により、ある程度同形同義語の語数がふやされた結果になった。使用実態の研究では、数字も同形語として扱っていいと思われる。

5. 中日両言語にも「国民」と「人民」のような言葉がある。しかし、日本語では前者が多く使われるのに対して、中国語では後者が多く使われる。中国語で「国民」という言葉は「国民经济」や「国民总生产」などの経済に関連する熟語として見られる程度である。これは、中日両国が言葉に対する使用習慣が異なるから、対訳作業では相手の国で親しみやすい同形語を使用すべき点を示唆している。

6. 対訳対照では、同形語は同形語だが、中国語を日本語訳では、表現の拡充が、日本語を中国語訳では、表現の省略が行われることが多く見られた。例えば、中国語の「科技」は日本語に訳すと「科学技術」になるが、日本語の「研究開発」は中国語に訳すと「研发」になる。お互いの表現習慣を尊重し、適当な変形が必要だと分かる。

7. 日本語の「○○的」の形の同形語は、対訳において中国語では、「○○的」、「○○」、「○○性」、「○○性的」、「○○地」、「○○化」など、多様多彩な対応の表現になっている。また、日本語の「○○化」のような同形語は、中国語では一概に「○○化」になるのではなく、「○○」にされているケースも多く観察された。形容動詞、漢字語のサ変動詞のような同形語は対訳ではゆれていることが分かる。

八、終りに

政治文献は、政府筋から発信され、相手国を理解する大切な文書であり、双方に正確に伝えられなければならない。対訳の場合でも同形語は確かに便利な面がある。しかし、その便利さに乗りすぎて、同形語かどうか、意味や使い方などが同じかどうかを確認せずに、盲目にそのまま写したら、むしろ落とし穴になるから、同形語の使用はより慎重な扱いが必要である。

参考文献

- [1] 荒川清秀. 1979. 「中国語と漢語—文化庁『中国語と対応する漢語』の評を兼ねて」. 『愛知大学文学学会文学論叢62』 愛知大学文学学会
- [2] 荒川清秀. 1988. 「複合漢語の日中比較」. 『日本語学』 明治書院. 5月号
- [3] 荒川清秀. 1998. 「ことばの行方を追う—日中同形漢語の意味と構造を考える—」. 『SINICA・5—特集 中国語学入門講座』
- [4] 荒屋勸. 1983. 「日中同形語」. 『大東文化大学紀要 (人文科学)』. 大東文化大学. 21号
- [5] 大河内康憲. 1997. 「日本語と中国語の同形語」. 大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集 (下)』 くろしお出版
- [6] 王蜀豫. 1998. 「『現代国語辞典』における同形語」. 『新潟大学国語国文学会誌40』 新潟大学人文学部国文学会
- [7] 王蜀豫. 2001. 『日中語彙の対照的研究—同形語を中心に—』 四川文芸出版社
- [8] 清水康行. 1998. 「文明開化と新造漢語」. 『SINICA・6—特集 漢字と日本語』
- [9] 高偉建. 1995. 「喚情的前提に関する日中同形語の対照研究—前提評価語の「評価 (する)」を中心に—」. 『現代日本語研究』 大阪大学現代日本語学講座. 第2号
- [10] 香坂順一. 1980. 「日中両国語の同形語について」. 『日語学習と研究』. 第2期
- [11] 侯仁鋒. 2002. 「日中言語における同形語の品詞の相違についての再考察」. 『Quality Japanese Studies and Japanese Language Education in Japanese Language Education in Kanji-Using Areas in the New Century』 香港向日葵出版社
- [12] 顧明耀. 1991. 「日中同形同義語の相違点」. 『外国語教育論集』 筑波大学外国語センター. 第13号
- [13] 瀋国威. 1993. 「現代中国語における日本製漢語」. 『日本語学』 明治書院. 12月号

现代政治文献中的中日同形词的应用及对译的调查研究

侯仁锋 鞠娟

摘 要

本研究对于中日现代政治文献中存在的同形词，利用北京日本学研究中心开发的中日对译语料库，进行了量的考察和统计，并在此基础上，对于中日双方的对应（对译）状况进行了探讨。主要结果如下：

（1）发现在现代政治文献中，作为中日同形词，仍然是同形同义词最多，其次是同形类义词，同形异义词最少。

（2）中日语言中都存在“国民”和“人民”这样的同形词，但是，日语多使用前者，而汉语多使用后者，表现出中日两国各自的国情不同及语言使用习惯的差异。

（3）中日对译上，从原文到译文照搬的同形同义词最多，一部分重叠的词次之，完全不同的词最少。

（4）在中日对译探讨中，发现对于由中日双方都有的汉字构成的单方面存在而另一方没有的词汇，误认为是同形词，既不加以解释、又不做任何说明就照搬的现象。如此重要的政治文献，如此操作，令人吃惊。因为这样的操作有可能导致双方无法理解甚或引起误解。相互照搬，应该慎重。

（5）在具体对译上，汉译日时，多见内容扩充；而日译汉时，则多见内容省略现象。